

20年ほど前のことだ。大学に入つて最初の夏休み。本山で催される修行道場に入行するため、不安と緊張感に苛まれながら寝台列車に乗り込んだ。多くの寺育ちの同年代たちと過ごす3週間の道場。みんなピカピカの丸坊主で、着飾ることも逃げることもできないまつさらな環境に放り込まれた。終わりが見えなかつた道場生活も、後半に差しかかると知り合いも増え、段々にぎやかになつてゆく。そこで、本山のほど近くに住む友人と仲良くなつた。

終わつた後は修行仲間たちと打ち上げ。もちろん事前には計画しているなかつたので、宿をどうしようかと考え悩んだ。すると、その友人が「うちに泊まつたらしいよ」とすぐに実家に電話をかけてくれた。急なことで迷惑この上なかつたと思うが、友人の母は歓待してくれて、親しくあたたかい時間を過ごすことができた。

その折に「息子がこれだけ短期間で仲良くなるのは珍しいことなのよ。連れてくると言われて、ちょっとビックリしたけれどどうれしいわ」と言られた。今考えるといくぶんかの気遣いを加えてくれたのだと思うが、当時の自分は、悪い気はしないどころか、内心うれしくてたまらない。まさに有頂天の気分で、入行前はとてつもなかつた憂うつが完全に打ち倒された瞬間だつた。

秋口に近くを訪れる用事があり、友人に電話したところ、残念な

工藤量導

こんなはずじゃなかつただろ?
歴史が僕を問いつめる
まぶしいほど青い空の真下で

(ザ・ブルーハーツ「青空」より)

OP-1 微風

微

風

吹

動

ちとの打ち上げでカラオケに行つた。友人は音楽が趣味だと言つてはいたが、少しシャイで積極的には歌おうとしなかつた。皆にうながされてようやく選んだのが、ザ・ブルーハーツの「青空」。はじめて聞いたその曲の美しい旋律としびれる歌詞、何よりそれを堂々と歌い上げる友人の姿がまぶしく、ほれぼれとみとれた。ひそかにこの歌を格好よく歌える大人になりたいと誓つた。

今でもこの歌を耳にし、カラオケで選曲するごとに友人の姿をなぞり描く。液晶テレビの向こう側で、コロナ禍での黒人差別問題やさまざまな社会問題が跋扈する現状を思い知らされるたびに、自然と口ずさんでいたのもこの歌だ。青空はただ誰のためにも等しくあら。それだけのこと。ともすれば青臭すぎるほどの正論が、友人の残像を伴い、煩悶する心をズバッと撃ち抜き救ってくれる。

「こんなはずじゃなかつただろ?」誰にも話すことのないフリーダライの記憶として封を閉じて時間を止め、苦い想いを蓄え続けた。それでも、今更ながら歩みを少し進めることができる気がしている。といっても、特別に何かえらくなつたわけでもない。当時の情けなさをようやく受け入れができるようになつたのだ。長すぎた青春が終焉する。夏が過ぎたら、バスに乗つて、青い空が見守る友人のもとを尋ねてみようと思つている。

がら実家にはいないが、母に言つておくのでぜひ泊つていつたらよい、と。ここでもばつちり甘えてしまう。友人の母は茶道の先生もしていて生徒さんが来ていた。お茶を立ててもらい、人生初の本格的なお茶と茶菓子をいただいた。やさしく甘い思い出だ。

年が明けて、また夏が、お盆が近づいてきた。いよいよ今年も修行道場などと考え始めていた矢先のこと。修行仲間から電話があつた。あの友人の訃報を伝える連絡だつた。

ほどなく友人の母に電話をかけた。年の近い知人を亡くしたのが初めてで、やや混乱しながらも、とにかく「お寺にうかがつて、会いに行つてもいいですか?」と伝えた。友人の母には「ごめんなさいね、今はまだ元気が出なくて会う気持ちになれないわ……」と返答された。この時の言葉が今でも耳底に深く残り続けている。

それから20年の月日がたつ。その間、何度も線香をあげに行きたいと思い、電話をとつた。：：がその都度、あの時の無粋なやり取りがぶり返して気持ちを引っ込めてしまった。前のめりで、相手の状況を慮れない、若気の至りのほろ苦さ。せめて、もう少しだけ立派になつてからにしよう。そんな言い訳を重ね続けた。

夏が来るたびに、わずか3週間と数日しか一緒に過ごすことのなかつた友人のことを思い出す。泊めてもらった日の晩、修行仲間た